



トレンガヌのキッズテニスに集まった子どもたち



キッズテニスの様子

「フェスピックでベスト3入りを目指しています」。車いすバスケの指導をする神保康広青年海外協力隊員(右端)



FIELD SKETCH

伊達さん、 スポーツの 素晴らしさを 再発見

JICAオフィシャルサポーターで、テニスプレーヤーの伊達公子さんが8月9～14日、マレーシアを訪問した。車いすテニス初心者や知的障害児とテニスを行ったほか、障害者のスポーツ支援や福祉向上に取り組むJICAボランティアの活動を視察した。11月に同国で初めて開催されるフェスピック に向けトレーニングを重ねる選手の姿に「自分を奮い立たせる機会があって、うらやましい」と語る伊達さん。スポーツの素晴らしさに改めて触れる6日間になった。

文・写真 = 工藤 美和 (JICA広報室)
text and photos by Kudo Miwa

極東・南太平洋障害者スポーツ連盟競技大会。4年に1度開催され、記録や順位競争にとどまらず多くの種目への参加を楽しむことを主旨としている。



マレーシア
Malaysia

真の先進国を目指すための協力

「これまでの国と違って、途上国のイメージはないですね」。伊達さん、マレーシアのクアラルンプールに降り立つと戸惑いの声をあげた。空港から市内へは立派な高速道路が走り、高層ビルがそびえる。経済発展を遂げ、いまや先進国入りを目指す国。JICAの協力が必要なのか疑問を抱いても不思議のない首都の景色が続く。

マレーシア事務所の井倉義伸次長は、そんな伊達さんに対して「JICA事業がピーク時に比べ半減していることを話し始めた。協力分野も、過去に伊達さんが訪ねたバン

グラデシユ、マラウイ、モロッコなどで行われている保健医療や教育、農村開発などとは異なり、環境、社会政策(障害者の自立支援、海賊対策など)、経済の連携促進、南南協力(マレーシアの経験を他の国の開発に生かす支援)に絞り込んでいる。かつての日本同様に経済成長の陰で後回しにされがちな分野が中心だ。

「歩道に空いた穴や壊れた排水溝の多さ、いつまでも横断できない道路など、街を歩いただけでも人に優しいとはいえない面を感じる。真の先進国になるためにはソフト面の支援が欠かせないんですね」と、伊達さんもようやく納得した様子だ。

今回の伊達さんの活動のテーマは「障害者スポーツ」。11月にマレーシアで初めて開催されるフェスピックのたのめる障害者スポーツをの障害者スポーツを中心とする障害者福祉分野の事業視察と、車いすテニス初心者や知的障害児とのキッズテニスを行うこと。マレーシアでのJICAの協力の柱と、以前から「障害があってもスポー



「視覚障害者にとって水泳が最も安全なスポーツ。普及させるためには指導者育成が欠かせません」。パラリンピック金メダリストの河合純一さん(右端)とコーチの寺西真人さん(左端)

ツは楽しめる」ことを伝えたいと考えてきた伊達さんの気持ちが変わった。

「うらやましい、ひたむきな姿」

フェスピックに向けて、JICAは障害者陸上、フェスピック運営支援と車いす製造、車いすバスケットボール、視覚障害者水泳で青年海外協力隊やシニア海外ボランティアを派遣しており、代表選手の強化と競技普及のための講習会を行っている。

中でも、車いすバスケットを指導する神保康広さんは元パラリンピック日本代表で米国での日本人プロ選手第1号、視覚障害者水泳の河合純一さんは4度のパラリンピック出場で金メダルを5個も獲得したスーパリアスリットだ。ボランティアの活動現場を訪ねた伊達さんは、迫力あるデモン



「体にフィットする車いすを国産できるようになれば、障害者の社会参加も広がります」。フェスピックの運営支援と車いす製造のアドバイスをを行っている麻生学シニア海外ボランティア(左)

トレーションや、きびきびと指示する姿に圧倒されながら、各ボランティアの活動を食い入るように見入っていた。ひたむきに練習を重ねる選手の姿には、自身の現役時代を思い出し、「自分を追い込み、奮い立たせる機会があつて、うらやましい」と思わずつぶやく場面もあった。

子どもたちの新たな一面に驚かされて

活動の後半はいよいよ伊達さんの本領発揮。8月12日には車いすテニス、13日には知的障害児を対象にしたキッズテニスによる交流を行った。

車いすテニスには、マレーシア車いすテニス協会からブレイヤー12人、国立障害者職業訓練リハビリテーションセンターからまいったの初心者11人が参加した。今回使

用したのはキッズテニス用の軽いラケットやスポンジボール。通常のテニスよりもボール・コントロールが楽にできるため、初心者は短時間のうちにラリーを楽しむまでになったほか、車いすテニスブレイヤーたちは、伊達さん相手に難しいブレイの練習をしたり、ゲームを楽しんだりしていた。この国の車いすテニス人口はまだ50人ほど。車いすテニス協

会会長は、「素晴らしいブレイを見せてもらい、いい刺激になった。今回JICAから寄贈された道具も入門者にぴったりで、競技普及のために活用していきたい」と今後の抱負を聞かせてくれた。

翌日、東海岸の地方都市クアラ・トレングアには、青年海外協力隊員の配属先の学校などから知的障害のある子ども30人が集まった。子どもたちは2時間も外で体を動



初めてテニスをした国立障害者職業訓練リハビリテーションセンターの生徒

かすのは初めて。引率の教師や隊員は、どこまでついていけるか心配していたが、伊達さんが笑顔で子どもたちの間に入っていくと、皆引き込まれるように動き出す。「ラリー、ラリー(動いて、動いて)」「ボレ、ボレ(できる、できる)」と声をかけながらリードする伊達さん。子どもたちはラケットをボールにうまく当て大喜びしたり、失敗すると悔しがって何度も挑戦したりと、誰一人飽きることなくコートを走り回っていた。あつという間の2時間。大人たちは子どもたちの順応性や集中力に目を見張る結果になった。

人々に働きかける隊員活動の意味

マレーシアでは障害者の社会進出はまだ限られており、学校に通うことができない子どもも多い。伊達さんはトレンガヌ州の



国立重症心身障害児入所施設「タマン・シナル・ハラバン(輝く希望の園)」で河野美保子隊員から子どもの発達や栄養状態について聞く伊達さん

障害者支援の青年海外協力隊員の活動視察を通じて、障害者を取りまく厳しい現実も知り、そうした中でも自分の道を切り開こうと努力する障害者の姿に胸を打たれた様子だった。「彼らを支え、周囲に働きかけて意識を変えていくJICAボランティアの活動からは国際協力の大切な意味を知った気がした」と振り返る。また、スポーツの素晴らしさに改めて気付く機会にもなったようだ。フェスピックを目指す

選手たちに同じアスリートとして共感し、初めてテニスを体験した子どもたちの笑顔に強く心を打たれたという。「障害がある人たちは社会の中で思うようにならないことも多いけれど、乗り越えた時の喜びや達成感は大きく、スポーツを通じてもそれを知ることができる。今回出会った人たちが、スポーツを楽しみ、ずっと続けていってくれたらうれしいですね」。そうかみしめるように話すと、伊達さんはさわやかな笑顔を残してマレーシアを後にした。



車いす陸上選手に質問する伊達さん。指導する荒井弘子シニア海外ボランティアが通訳

NOTE

「果物の王様」に完敗

伊達さんがJICAから途上国に派遣される際に楽しみにしているものの一つが、現地の食文化だ。

マレーシアはマレー系、中華系、インド系など多民族がそれぞれの文化、宗教を大切に共存しているため、各料理を同時に味わえるのも魅力。伊達さんも、中華風のチキンライスに始まり、マレー風うどんのラクサ、インド風カレーなどを楽しんだ。

トロピカルフルーツも豊富だ。現地スタッフに勧められ、「果物の王様」といわれるドリアンに挑戦した。ホテルや乗り物には持ち込み禁止とされるほどの強烈なおいから、好き嫌いが分かるとされるが、伊達さんは後者になってしまったよう。

マレーシアの人たちはドリアンが大好きで、買う時は実際に皮を割り果肉を触って吟味して、と念を入れるほど。今が旬とあって行く先々にドリアンの香りが漂う。2度、3度と食べるとそのおいしさが分かるといわれるが、おいに悩まされ続けた伊達さん、「再挑戦は無理」と苦笑いしていた。



強烈なおいを我慢しながらドリアンに挑戦する伊達さん